5 八橋宿と京・鎌倉往還の整備

古代の東海道と駅制

古代には都から諸国への街道が新設・整備され、道である東海道（古代東海道）も整えられました。およそ一定の距離に設けられた駅には馬や食料などが用意され、駅鈴を与えられた駅使が通行の際に利用していました。三河国には鳥捕駅（現・岡崎市）、山綱駅（現・岡崎市）、渡津駅（現・豊川市）がおかれました。平安時代になると次第に駅制は廃れていき、平安後期には十分に機能していなかったようです。

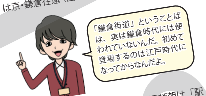
『伊勢物語』をはじめ、『更級日記』には八橋のことが触れられ、行き来する人々が八橋のことを歌に詠んでいますから、平安後期の八橋には伝馬や宿泊などの施設が設けられていたのかもしれません。平安後期には宿という語が定着しつつあり、駅と同義で使用されているようです。江戸時代の旅籠が立ち並ぶ宿場の様子とは異なり、宿泊施設は町屋とともに寺院が多く利用されていました。

図1　古代東海道（推定）と京・鎌倉往還（推定）　中川貴皓作成

図2　在原寺と京・鎌倉往還（推定）　事務局撮影

京・鎌倉往還の成立

平安時代には、古代東海道近辺の通行しやすい道が利用されるようになりました。鎌倉幕府が成立すると、京都と鎌倉を行き来する人が増え、源頼朝は街道を整備しました。それは一般的に鎌倉街道と呼ばれていますが、ここでは京・鎌倉往還（図1）と表記することにします。



文治元年（1185）11月29日、源頼朝は「駅路の法」を定めました。これは京都に上る使者が伊豆・駿河国以西から近江国に到るまで、伝馬や食料を沿道の荘園から徴収することを認めたものです。建久5年（1194）11月8日、頼朝は京・鎌倉往還の駅に早馬や匹夫を設置し、「大宿」には8人、「小宿」には2人を用意することを命じています。この頃には新しい宿が増えてきたので、重ねて早馬以下の設置を命じたわけです。

京・鎌倉往還の管理と宿の長者

承元4年（1210）6月13日、幕府は駿河国以西の京・鎌倉往還において守護を通じて「海道駅家等結番夜行番衆」に旅人の警固をさせたり、翌建暦元年（1211）6月26日に、守護・地頭らに新しい宿を立てるよう命じたりしました。文応2年（1261）2月25日に、幕府は早馬を宿に2疋置き、それ以上を徴発しないこと、「京下御物送人夫」も多く徴発しないよう荷物の量に応じて人数を定めること、「私物送夫」を停止し、夫役を路次で強制的に徴発しないことなどを命じました。これらより宿や道路の管理は、幕府の指示を受けた守護や地頭らが担っていたと見なされます。

宿内では「宿長者」などとよばれた、宿を管理していた者の存在が知られています。女性が務めていた例もあり、遠江・駿河国の宿の長者には武士領主の血縁による同族のつながりがあって、宿の運営をめぐって連携していました。尾張国の萱津宿（現・あま市）のように、有徳人と称される裕福な商人が「宿長者」と呼ばれていた場合もありました。

PICK UP!

知立・八橋を行き来した人々の紀行文

京・鎌倉往還が整備されていくと、旅をした人が紀行文を著し、市域の知立や八橋の様子を書き伝えました。貞応2年（1223）4月8日、『海道記』の作者は京都から鎌倉に下る途中で、二村山を越して境川を渡り、「雉鯉鮒」・八橋を通過しました。ここには「雉鯉鮒ガ馬場」を過ぎて、数里の野原を進み、八橋に至っており、市域の様子が簡略ながら描写されています。

この「馬場」は市域北部から豊田市駒場町一帯に広がっていたとみなされています。「雉鯉鮒」の地名から、沿道もしくはその付近に集落が形成されていたと導かれますが、この頃の「雉鯉鮒」にはまだ宿としての設備は整っていなかったと思われます。

八橋には一つ二つの橋が架かっていて、杜若が咲いていること、しばらく進んだ宮橋という所では渡し板が朽ち、八本の橋柱は残って溝にあるといったことや、この地に至った心情などを綴っています。

弘安3年（1280）11月、飛鳥井雅有が鎌倉に下向する際に八橋の様子を記しています。雅有は『春の深山路』に、蜘蛛手と言われていた様子と異なり、今はただ二つの橋があるのみで、杜若も見えないと述べています。

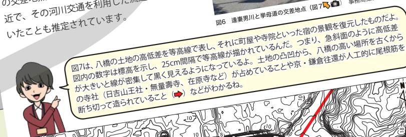
八橋宿の構造と流通

八橋宿は大きく四つのエリアに分けられます。①宿中心部の町屋、②寺院群、③在家、④市場・墓域です（図7）。

上重原町や重原本町（刈谷市）の領域は、古代の東海道の推定経路や中世の京・鎌倉往還からは少し南に外れた地域にあります。上重原地域からの道路、あるいは河川の流通によって、東海道もしくは京・鎌倉往還と結びついていたはずですが、具体的な経路などは不明です。八橋宿は逢妻男川に近いので、逢妻男川と挙母道の交差地点（図6）や京・鎌倉往還の渡しの付近で、その河川交通を利用した流通が展開していたことも推定されています。

図5　寺院群の中心となった日吉山王社と無量壽寺　事務局撮影

図6　逢妻男川と挙母道の交差地点（図7 ↖📷）　事務局撮影



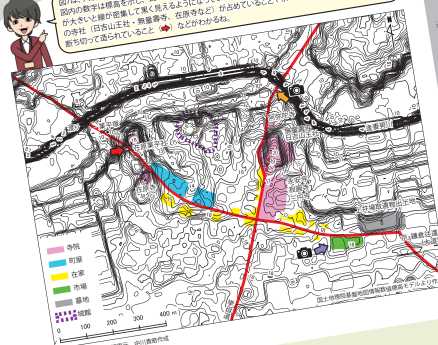


図7　中世八橋宿の景観復元　中川貴皓作成

sample